2024年6月23日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

真剣なやりとり

［コリントの信徒への手紙二9章1～12節］

「聖なる者たちへの奉仕について、これ以上書く必要はありません。わたしはあなたがたの熱意を知っているので、アカイア州では去年から準備ができていると言って、マケドニア州の人々にあなたがたのことを誇りました。あなたがたの熱意は多くの人々を奮い立たせたのです。わたしが兄弟たちを派遣するのは、あなたがたのことでわたしたちが抱いている誇りが、この点で無意味なものにならないためです。また、わたしが言ったとおり用意していてもらいたいためです。そうでないと、マケドニア州の人々がわたしと共に行って、まだ用意のできていないのを見たら、あなたがたはもちろん、わたしたちも、このように確信しているだけに、恥をかくことになりかねないからです。そこで、この兄弟たちに頼んで一足先にそちらに行って、以前あなたがたが約束した贈り物の用意をしてもらうことが必要だと思いました。渋りながらではなく、惜しまず差し出したものとして用意してもらうためです。

つまり、こういうことです。惜しんでわずかしか種を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです。各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。神は、あなたがたがいつもすべての点ですべてのものに十分で、あらゆる善い業に満ちあふれるように、あらゆる恵みをあなたがたに満ちあふれさせることがおできになります。「彼は惜しみなく分け与え、貧しい人に施した。彼の慈しみは永遠に続く」と書いてあるとおりです。種を蒔く人に種を与え、パンを糧としてお与えになる方は、あなたがたに種を与えて、それを増やし、あなたがたの慈しみが結ぶ実を成長させてくださいます。あなたがたはすべてのことに富む者とされて惜しまず施すようになり、その施しは、わたしたちを通じて神に対する感謝の念を引き出します。なぜなら、この奉仕の働きは、聖なる者たちの不足しているものを補うばかりでなく、神に対する多くの感謝を通してますます盛んになるからです。」

[1] 「献金」を語る難しさ

 今日は、本日の聖書箇所を通して、少し、多分これまであまりお話することがなかったことについてもお話させて頂きたいと思います。私も実はこのことについて「絶対こうでなければいけない」という正しい答えのような確信を持っている訳ではありません。ただ私が自分の経験や自分の信仰と照らし合わせて思っていることを少しお話させて頂き、また、そのことで神様の恵みに心を向けさせて頂きたいと思っています。それはどういう事柄かというと、「献金」ということです。「献金」、お金を献げるということです。礼拝献金とか月定献金とか…。牧師がこのことを話しにくいという一つの理由は、牧師が、教会の皆さんの尊いご献金の中から「謝儀（謝礼）」を毎月頂いているからです。ですから教会の皆さんにプレッシャーになるような表現はしたくありません。そして、何か責められたなどと思わないで頂きたいと思います。もしそのように聞こえる部分がありましたら予め、ごめんなさいと謝っておきます。圧力をかけるつもりは全くないのです。ただ、基本的にこのことはご理解頂きたいと思っていることは、皆さんと私は、雇い人と雇われ人の関係ではないということです。まあ、皆さんの中にそう思っておられる人はいらっしゃらないとは思っていますが。では、牧師や教会の伝道師とはどういう者かと言えば、この具体的な教会の教会形成のために一緒に働く（協働する）人として、招聘をされ、それを受諾した者です。特にバプテスト教会の良さというものは、この‟協働”ということを大事にしている点です。

　ですから、その意味ではお金を頂いているというのは、ちょっと矛盾しているなと思うことがあります。バプテストの教会は「牧師」も一人の信徒なのですから、謝儀というものはナシ、というのが本当ではないかと思うことがあります。もし「謝儀」というものが、「教会のことは、牧師にお任せします」という性格のものならば、私は謝儀を受けたくありません。川越教会は牧師の教会ではありませんね。牧師も含む、私たち・皆さんが主体的に形成し、維持して行く教会です。

　今、川越教会は曲がり角に来ていると思います。恐らく皆さんもどこかでこのままではいけないな、と感じていると思います。本当に祈りが必要だと思います。今日、今日は礼拝後に執事会もあるので、またそのことについて話し合いたいと思っていますけれども、この9月に是非、これからの川越教会について、文字通りの‟全体協議会“を開きたいと思っています。その前にも、私からの提案と言いますか、一緒に考えて行くためのテーマを挙げさせて頂きたいと思っています。

[2] 主によって豊かにされているから

 前置きが長くなってしまって申し訳ありません。本日の箇所に移ります。

コリントの信徒への手紙二で、パウロは、教会における「献金」の必要性を語っています。キリストの教会は、紀元1世紀の当初から、信徒の方々の自発的な献金によって形成・維持されてきました。牧師や伝道者に滞りなく謝儀が渡されるようになったのがいつからであるのかは分かりません。恐らく随分後の時代ではないでしょうか。しかし、この当時のアカイア州の教会でも、他のユダヤのエルサレム教会のためにも、献金を用意していたのです。エルサレムの教会は、天災に見舞われたり、また貧しい人たちが多かったということもあったり、迫害にあったりして非常な困窮状態にあったようです。パウロ自身もユダヤ人でありましたし、最初期の拠点教会であるエルサレム教会を助けることは、自分たちの信仰の原点を確認していくことでもあったと思います。自分たちの事だけで精一杯だというのは、福音に生きる在り方とは違うということをクリスチャンたちは初めから大切してきていたのですね。言うならば「献金」というのは、‟余り”があるからするのではなくて、祈りであり、愛なのですね。2節には 「あなたがたの熱意は多くの人々を奮い立たせた」とあります。冷めた心ではなく熱い思いです。はて、私自身は熱い思いで献金が出来ているかな？と問われるところです。

そしてパウロは5節で「以前あなたがたが約束した贈り物の用意をしてもらうことが必要だと思いました。渋りながらではなく、惜しまず差し出したものとして用意してもらうためです」と書いています。この「贈り物」が献金ということですが、元々の意味は「祝福」という意味があるようです。私たちが教会やどこかに献金するということは、「愛」であり、「祝福」を祈ることなのです。そして、それはどこから生まれてくるのか。コリントⅡ8：9節です。―「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです」。これは、もう、主イエス・キリストが私たちの救いのために天の御座を捨てて、罪人である私たちの所に降りて来て下さった、そのことによって、私たちは真の意味で富んだ者とされたのだ！とパウロが喜びを持って語っていることです。私たちはいつも「貧しい貧しい、ギリギリギリギリ」と言ってしまいます。確かにそうかも知れない。しかし、心は主によって豊かにされているじゃないですか！そうでなければ、本当には献金なんて出来ません。渋々献げるだけです。ですから先ほどパウロは「渋りながらではなく、惜しまず差し出したものとして用意してもらうためです」と言いました。皆さん、献金というのは、ある意味、皮算用を超えたものなのではないでしょうか？ 私自身は、19歳でクリスチャンになり、それから月定献金もするようになりました。まだ学生でしたが、少ないながらも月定献金の袋に入れて献げました。一年間献げられた最初の年は、思わず袋に「やった！一年間パーフェクト」と書いてしまいました。そうしたら、戻って来た袋に、会計執事の方（伊与田さんという方でした）が、若造に「一年間支えて下さりありがとうございました。神様の祝福を祈ります」と書いて下さいました。それを今思い出しましたね。とても嬉しかった。それから月約をしない月はないです。自慢しているのではありません。私がいつも思い起こす聖句は、「天に宝を積む」（マタイ6:20）です。最も素晴しいお金の使い方じゃないですかね？主のために惜しまず献げるということは、無駄どころか、大きな報いさえあるのです。

[3] イエス様が見ていて下さる、その事実に押し出されて生きる

9:6。「つまり、こういうことです。惜しんでわずかしか種を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです」。また、9:11にはこうありました。「あなたがたはすべてのことに富む者とされて惜しまず施すようになり、その施しは、わたしたちを通じて神に対する感謝の念を引き出します」。この「あなたがたはすべてのことに富む者とされて」というのが良いですね。私たちは主によって心豊かにされて生きて行けるのです。そして人生を全く委ねて行けるのです。

私は献金という時、レプトン銅貨二枚を献げたやもめの物語（ルカ21:1-4）をやはり思い起こします。あんなに大胆な献金はありません。一人暮らしの未亡人です。その人が生活費全部を献げてしまったというのですから。何がこの人の心にあったのかは分かりません。無謀じゃないですか？この先どうやって生きて行くのか心配してしまいます。しかし、それは私たちが心配することじゃないのかもしれません。「神があなたがたのことを心配してくださるから、あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい」という御言葉（Ⅰペテロ5:7新改訳）もあります。この女性は、誰にも知られないと思っていたと思います。しかし、この女の人の真剣な神様への信頼と愛、それを主イエス様はご存じであったということですよね。イエス様もこの人の真剣さに心震えたと思います。しかしまずは、主が私たちの救いのためにどんな善き事をして下さったのか、どんな真剣な愛を持って犠牲を払って下さったのか、その事実に押し出されることが一番大事な事ではないでしょうか。―「わたしは決してあなたを離れず、あなたを捨てない」（へブル13:5 口語訳）。

献金‟額”のことを神様は問わないです。でもそのハートについてはご覧になるでしょう。今、あなたの心はどこに結びついているのか。わたしはそこに居るのかと。神様は、このやもめではありませんが、時に自分でもビックリするような決断をさせて下さる時があるのではないでしょうか？―自分を明け渡すこと、自由になることです。私たちのために真剣な愛を持ってご自身を献げ切って下さった主イエス様が、私たちに真実な応答をさせて下さるのです。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、あなたの大胆な愛を覚えます。それに引き換え、何と私たちは大胆になれないことでしょうか？自分にしがみついているからでしょうか？どうか、私たちなりに、真剣に、真実にあなたにお従い出来ますように。その心と力をお与え下さい。この川越教会を祝福して下さい。お一人おひとりを祝福し、永遠の生命のお約束の中に共に歩ませて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。